

野菜

実 況…(27年7月20日現在)

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

半促成栽培は、南越地区で収穫終盤となっており7月24日で終了予定である。福井地区では7～8段果房を収穫中で収穫終盤となっている。一部の摘芯を遅らせたところでは7月末まで収穫する見込みである。4月中旬定植の若狭地区では3～4段果房を収穫中である。

灰色かび病が微発、うどんこ病が微～一部多発、アザミウマ類、コナジラミ類が微発である。

抑制栽培は、坂井地区で7月10日から順次定植開始となっている。福井地区では7月15日から定植開始となっている。

アザミウマ類が少発である。

(2) ミディトマト

半促成栽培は、3月中旬定植の福井・坂井・南越・若狭地区で、6～8段果房が収穫中で収穫終盤となっている。4月中旬定植の奥越地区では、12～13段果房が開花中、3～5段果房が収穫中となっている。5月下旬定植の池田町では、8～9段果房が開花中で収穫開始となっている。

青枯病が一部少発、葉かび病が微～少発、うどんこ病、灰色かび病が少発、アザミウマ類が微～少発、トマトサビダニが微～局小発である。

抑制栽培は、福井・坂井・南越・若狭地区で、6月中～下旬頃から順次定植されており、生育の早い所では4～5段果房が開花となっている。

若狭地区の促成長期どり栽培では、高浜町で7月14日から、小浜市で7月22日から定植開始となっている。

(3) キュウリ

県内の半促成栽培は、7月上～中旬にかけて収穫終了した。

抑制栽培は、福井地区で7月30日頃に定植開始予定である。若狭地区では6月下旬から定植開始で8月上旬にかけて順次定植の予定である。生育は良好で早いもので収穫開始となっている。

(4) ハウススイカ

三里浜砂丘地は6月末、坂井北部丘陵地では7月上旬で出荷を終了した。

(5) メロン

半促成栽培のアールスメロンの収穫は、坂井北部丘陵地で6月20日から、三里浜砂丘地で7月3日から開始された。品質は良く3L～4L中心の玉揃いとなっている。

ネコブセンチュウが一部多発である。

抑制栽培は三里浜砂丘地で6月中旬から、坂井北部丘陵地では7月上旬から順次定植が行われている。早いものでは7月中旬に開花交配となっており、開花や着果は良好である。

坂井北部丘陵地のアンデスメロンは、昨年よりやや早い6月18日から収穫開始となっている。

アブラムシ類、センチュウ類が少発である。

マルセイユメロンは、坂井北部丘陵地で6月初旬から収穫が行われており7月上旬で終了した。南越地区のマルセイユメロンは、7月15日に終了した。

(6) イチゴ

現在育苗中で、順次ランナーを配置している。

葉根菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区のハウレンソウは、6月中旬播種が30～40日で収穫となっている。
萎凋病が多発である。

2 露地野菜

果菜類

(1) ピーマン

4月下旬定植の丹生地区は、草丈80～100cm、15段開花で8～9番果を収穫中である。5月中旬定植の福井市清水地区では、草丈54cm、7～8段開花で3～4番果を収穫中となっている。

白絹病、ニジュウヤホシテントウ、アブラムシ類が微発である。

(2) スイカ

三里浜砂丘地は7月1日～10日にかけて収穫された。坂井北部丘陵地では7月9日から収穫開始され7月31日まで継続出荷の予定である。

南越地区では、7月30日から出荷開始の予定である。丹生地区では7月27日から直売所用として収穫開始の予定である。

つる枯病が少発、炭疽病が少～一部多発、アザミウマ類が中発である。

(3) カボチャ

坂井北部丘陵地は、7月初旬から収穫開始で7月末まで続く見込みである。

うどんこ病が多発である。

(4) ナス

奥越地区は、主茎長140～150cmで昨年並の生育となっており継続収穫中である。

うどんこ病、アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類、カメムシ類、タバコガが少発である。

(5) エダマメ

二州地区は、7月下旬から収穫開始の予定である。

(6) キュウリ

丹生地区は、5月下旬定植が収穫中である。若狭地区の加工キュウリは、主枝の収穫がほぼ終わり側枝上～中段を収穫中である。

褐斑病が微～少発、べと病が微～一部多発、ウリノメイガが微発である。

(7) スイートコーン

福井地区は6月29日から収穫開始で7月6日～10日が収穫盛期となった。現在5月初旬直播したものを収穫中である。

アブラムシ類、カメムシ類が微発、アワノメイガが少発である。

葉根菜類

(1) ブロッコリー

秋冬どりの播種が、南越地区で7月8日から、福井地区では7月15日から開始され育苗中である。若狭地区では7月下旬から定植開始の予定である。

(2) ネギ

秋冬どりは、福井地区の3月末定植が、地上部長85～90cm、葉鞘径が25～27mmとなっている。奥越地区の4月上旬定植は、地上部長75～80cm、葉鞘径が19～23mmとなっている。坂井地区の4月中旬定植が、地上部長43～75cm、葉鞘径12～20mmとなっている。若狭、南越地区の4月下旬定植は地上部長70～77cm、葉鞘径16～17mmとなっている。丹生地区では、5月中下旬定植が地上部長50cm、葉鞘径14～17mmとなっている。生育は、昨年と比べ全体的に若干遅れ気味となっている。

萎凋病が小発、軟腐病が一部少発、黒斑病が少～一部多発、白絹病が少～局中発、葉枯病が微発、さび病が少～一部多発、アザミウマ類が微～中発、ハモグリバエ類が少～中発である。

奥越地区の越冬どりは、自家育苗が7月中旬頃から定植開始となっている。購入苗は8月6日から苗を配布する予定である。

(3) キャベツ

夏まき秋冬どりの播種が坂井北部丘陵地で6月25日から開始で7月上旬から定植が始まった。福井、坂井、南越地区の水田地帯では、7月上～中旬から播種が行われ育苗中である。定植は7月下旬から順次開始の予定である。県内の購入苗による定植は8月上旬からの予定である。

アオムシが一部微発である。

(4) シソ

福井市のシソは7月6日で出荷終了した。

(5) アスパラガス

福井地区は、26年定植が立茎開始で8～10本、草丈150～160cmで摘芯済となっている。27年定植が立茎4～8本、100～120cmとなっている。

アザミウマ類が微発である。

根菜類他

(1) カンショ

坂井北部丘陵地は、6月末で定植が終了した。乾燥の影響で生育はやや緩慢である。

(2) ニンジン

初夏どりの収穫は、三里浜砂丘地で6月4日から7月上旬にかけて、坂井北部丘陵地では6月21日から7月上旬にかけて行われた。抽苔は1割弱と少なかった。

夏まき秋冬どりは、坂井北部丘陵地の早い所で7月7日から播種開始となっている。本格的な播種は7月20日以降の予定である。

(3) サトイモ

奥越地区では主茎長90～110cm、生葉数5～6枚と平年並の生育となっている。ハダニ類、ヨトウムシ類、セスジスズメ、アブラムシ類が少発である。

(4) ラッキョウ

3年子は6月7日から収穫開始で7月下旬まで収穫の予定である。平年に比べ収量はやや少ない見込み。

(5) ニンニク

永平寺町では、貯蔵したものを調製出荷中である。

(6) タマネギ

永平寺町では、貯蔵したものを調製出荷中である。

(7) ショウガ

福井地区は、1～2本立茎、草丈50～75cm、葉数7～8枚となっている。

対 策

8月は晴れの日が多い見込みと予想されているため、引き続き高温時の肥培管理に留意すること。施設内においては、寒冷紗による遮光や敷きわらを厚くするなど地温の低下に努める。特に、猛暑日が続く場合は、高温障害の発生が懸念されるため発生防止対策について徹底するとともに、露地作においても干ばつ害に対する予防策に万全を期す。

また、害虫の発生も多くなることから早期発見と適正使用による農薬防除に努める。なお、秋冬野菜については、圃場準備を計画的に進めるとともに、安定した収穫を得るため、適期播種・適期定植に努める。

日中のハウス内作業は40℃を超えることがあるので、管理作業は涼しい時間帯に行う。また、無理な作業は絶対に避け、水分補給や十分な休養を取って熱中症を回避する。農薬散布を行う場合は、人への危害および農薬による農作物被害防止の観点から、日中の高温時を避けて、早朝または夕方の涼しい時間帯に行う。

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

高温による生育停滞や着果率の低下を防ぐため、ハウスのサイド、肩上部、妻部、連棟の谷部等を大きく開放して換気を十分に行う。特に、高温になる日中の時間帯には、遮光を行い気温の上昇を抑える。しかし、過度な遮光はトマトを徒長させ、花質を悪くするので留意する。

若苗を定植する抑制栽培では、過繁茂の防止と根群発達を促進させるため、かん水は定植後から3段開花頃まで控えめにするが、萎れさせないよう適宜かん水を行う。果実肥大が始まる3段開花頃になると、着果負担が増し、草勢が急激に低下しやすくなるので、追肥、かん水を積極的におこなうとともに、遅れないように留意する。ホルモン処理は空洞果の発生を防ぐため、1果房3～4花咲いた時に、夕方トマトーン100倍にジベレリン5～10ppmを混用して噴霧する。さらに、高温で害虫発生が多くなるので、防除を徹底する。

(2) ミディトマト

高温で果実の成熟日数が短いため、3段果房開花頃から節水管理に努める。ただし、高温下では、草勢確保がしにくく、また、土壤の乾燥による尻腐果の発生も出やすくなることから極端な節水管理は避け、草勢や開花状況を見ながらできるだけ地温の低い時間帯にかん水する。軟化果の発生は、高温時に多発するためハウス換気や遮光により果実温度を下げる。また、白ぶくれ症果、金粉症果の発生はスリップス類やハダニ類が関与するため防除を徹底する。

(3) 抑制ネットメロン

開花期まではやや控えめなかん水として根群の発達を促し、収穫前の極端な草勢低下を防ぐ。着果後はかん水を増やし果実肥大を促す。ネット発生がみられたらかん水を控え、ヒルネットの発生を防ぐ。さらに、ネット発生盛期には再びかん水量を多くして果実肥大を促すと同時にネット発現を良くする。なお、高温のためネット発現が弱くなりやすいので、ネット発生前にはハウス換気を十分に行って果実の硬化を図っておく。また、うどんこ病、アブラムシ類等の病虫害防除を徹底する。

(4) イチゴ

健苗を育成するため古葉、病葉、余分なランナーを除去し、追肥やかん水により株の生育を促す。疫病、炭疽病、萎黄病に注意し罹病株の破棄や、ハダニ類、うどんこ病等

の病虫害は育苗段階での徹底防除に努め、本圃に絶対持ち込まないようにする。

軟弱野菜

(1) ホウレンソウ

高温期は立枯病等の発生が多くなるので、播種時に十分にかん水し遮光を行って地温を下げる。なお、遮光は土壌の乾燥による発芽不良や生育遅延を防ぐ効果はあるが、ホウレンソウの生育が軟弱となるため播種密度を下げて徒長を防ぐ。また、高温時の収穫は適期幅が短いので、収穫労力を考慮して段播きとする。一方、作付けをしないハウスでは高温を利用して太陽熱土壌消毒を行う。

(2) コマツナ

コナガ、アオムシ、キスジノミハムシ等の害虫は、ハウス出入り口やサイドに寒冷紗等を張ることで防止する。また、徒長防止のため播種密度を下げる。

県園芸試験場の成績では、0.8mm 目合いネットでキスジノミハムシの侵入防止に有効であるとの結果がある。

2 露地野菜

果菜類

(1) ナス、ピーマン

敷きわらを厚くすることで高温による根の衰弱を防ぐとともに、適宜にかん水や追肥を行うことで草勢の健全維持を図り、つやなし果、日焼け果、尻腐果等の発生を防ぐ。高温期は、常に畝間が湿っている程度の土壌水分が必要であるが、かん水は夜間地温が下がってから畝間に入水する。畝の3分の2程度の高さまで湛水したら直ちに落水する。ただし、湛水時間はできるだけ短くする。また、接木苗を使用しなかった場合は、青枯病の蔓延が懸念されるので畝間かん水は避け、かん水チューブ利用等によるかん水を行う。また、ハダニ類、チャノホコリダニ、ミナミキイロアザミウマ等の害虫の発生も多くなるので、誘引・整枝・摘葉を徹底する等、薬剤散布の防除効果を高めるとともに、健全な樹体を維持し、果実品質の低下を防ぐ。

(2) キュウリ

根が浅く分布することから特に、敷きわらを厚くして高温による根の衰弱を防ぐ。また、追肥、かん水を適宜に行なって着果負担による草勢低下を防ぐ。なお、かん水は夜間地温が下がってから畝間に湛水し、直ちに落水する（畝間が長時間湛水状態にならないようにする）。また、古葉や込み合った葉は適宜に摘葉し、べと病、褐斑病、斑点細菌病、うどんこ病等の防除を徹底する。

葉菜類

(1) 夏まきキャベツ、ブロッコリー、ハクサイ等

水田転換畑では、ゲリラ豪雨や台風による大雨が、圃場の排水不良と相まって生育不良、品質低下につながっている。このようなこと避けるため、圃場内の排水対策を十分に行っておくこと。また、耕うん整地作業は出来るだけ碎土率を高め、定植後の活着促進や除草剤効果が十分に発揮できるようにする。定植は、午後気温が下がってからおこない根鉢が隠れる程度にやや深めに植え付け、直にかん水を行い根鉢の乾燥を防ぐ。活着するまでは圃場が乾燥しないように管理する。なお、除草剤は土壌が湿っている時に、乳剤を散布するのが効果的である。害虫対策は、育苗期後半時に箱施用する農薬が省力かつ予防効果が高いため活用する。

(2) 白ネギ

猛暑日が続くと、ネギの生育は停滞するため、土寄せは生育状況を見て判断して行う。ただし、高温時に土寄せをする場合、降雨により軟腐病の発生を誘引する場合がありますので、事前に粒剤などで予防散布を行う。また、高温乾燥が続くとスリップス類の発生が多くなる等病害虫の発生も多くなるため、早期徹底防除に努める。

根菜類

(1) ダイコン

高温によって生育不良や根部の生理障害が発生しやすいので、8月下旬に温度が下がってから播種する。早まきを行う場合は、ウイルス病の発生防止のため寒冷紗等による被覆を行う。また、圃場は深耕し、碎土率を高めて排水や通気性を良くする。なお、施肥直後の播種では曲がり根や岐根が多くなるので、早めに圃場準備を済ませる。なお、播種時には殺虫剤を施用して害虫の初期防除に努める。

(2) ニンジン

圃場の準備は、プラソイラー等で排水対策をしっかりと行い、特に収穫機を利用する場合は、必ず施工しておく。センチュウ類対策として播種前に殺虫剤を土壌混和しておく。耕うんはできるだけ細かく碎土し均平にする。播種後のかん水は土壌水分が十分確保できるように散水するとともに、かん水ムラは発芽不良、生育の不揃いの原因になるので、風向きやかん水チューブのねじれや詰まり等に注意しながら実施する。

(3) サトイモ

圃場の乾燥が続くと、イモの肥大や品質に影響がでるため、早朝か夜間に畝間かん水を行い、畝間が白く乾かないように留意する。また、ハダニ、アブラムシ、セスジスズメ等の害虫防除を徹底する。